

# オルガギつね

酒井悠人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

息拔きにオルガBBを見ていたら降ってきた一発ネタ。

約束

# 目次

1



# 約束

これは、私が小さいときに、村の茂平というお爺さんからきいたお話です。

昔は、私たちの村の近くの、ギャラルホルンというところに大きな要塞があつて、ラストル様という司令官様が、おられたそうです。

そのギャラルホルンから、少し離れた山の中に、「オルガ」という、大きな前髪を一房携えた狐がいました。

オルガは、子狐たちのリーダーで、シダのいっばいしげった森の中に穴を掘って住んでいました。

そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。

畑へ入って芋を掘り散らかしたり、菜種殻の、干してあるのに火をつけたり、百姓家の裏手につるしてある唐辛子をむしりとったり、「鉄華団」という子狐たちの組織を作ったり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。

二、三日雨が降り続いたその間、オルガは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨が上がると、オルガは、ほっとして穴から這い出ました。

オルガは、村の小川の堤まで出てきました。

川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水がどっと増していました。

オルガは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。

オルガは、見つからないように、そうと草の深いところへ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十ひょうじゅうだな」

と、オルガは思いました。

兵十はボロボロの黒い着物をまくしあげて、腰のところまで水に浸りながら、魚を捕る、はりきり網を揺すぶっていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一番後ろの、袋のようになったところを、水の中から持ち上げました。

その中には、芝の根や、草の葉や、腐った木切れなどが、ごちやごちや入っています。でもところどころ、白いものがきらきらと光っています。

それは太い火星ウナギや火星キスの腹でした。兵十は、魚籠の中へ、その火星ウナギや火星キスを、ゴミと一緒にぶち込みました。

兵十はそれから、魚籠を持って川から上がり、魚籠を土手に置いて、何かを探しにか、川上の方へ出かけて行きました。

兵十がいなくなると、いたずらがしたくなつたオルガは、草むらから魚籠のほうに飛びだし、魚籠のなかの魚をつかみ出して、川の下手のほうにポンポンと投げ込みました。どの魚も、ドボンと音を立てて、濁つた水の中に潜り込みました。

一番最後に、太い火星ウナギを掴みにかかりましたが、何しろヌルヌルと滑るので、手では掴めません。

オルガはじれつたくなつて、頭を魚籠の中に突っ込んで、火星ウナギの頭を口にくわえました。

火星ウナギは、キュツと行って、オルガの首へ巻きつきました。

その途端に兵十が、向こうからやって来て。

「うわあ、盗つ人オルガめ！」

と、どなりたてました。

オルガは、びっくりしてとび上がりました。火星ウナギを振り捨てて逃げようとしたが、火星ウナギは、オルガの首にまき付いたまま離れません。

オルガは、そのまま横つとびに飛び出して一生懸命に、逃げていきました。

洞穴の近くの、ハンノキの下でふりかえつてみましたが、兵十は追っかけては来ませ

んでした。

オルガは、ほっとして、火星ウナギの頭を噛み砕き、やつと外して穴の外の、草の葉の上に乗せておきました。

十日ほどたって、オルガが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかると、その、いちじくの木の陰で、弥助の家内が、お齒黒を付けていました。

鍛冶屋の新兵衛の家の裏を通ると、新兵衛の家内が、髪をすいていました。オルガは、村に何かあるのか、と思いました。

「なんだよ、秋祭りか。祭りなら、太鼓や笛の音がしそうなもんだが。それに第一、お宮にのぼりがたつはずだが」

こんなことを考えながらやってきますと、いつのまにか、表に赤い井戸がある、兵十の家の前へ来ました。

その小さな、壊れかけた家の中には、大勢の人が集まっていました。余所行きに着物を着て、腰に手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えています。

ああ、葬式かと、オルガは思いました。

「兵十の家の、誰が死んだのか」

お昼が過ぎると、オルガは、村の墓地に行つて、六地藏さんの陰に隠れていました。



いいお天気で、遠く向こうには、お城の屋根が光っています。

墓地には、彼岸花が、赤いきれのように咲き続けていました。

と、村の方から、カーン、カーンと鐘が鳴ってきました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列の者たちがやってくるのがちらちら見え始め、話し声も近くなり、葬列は墓地へ入っていききました。

人々を通った後には、希望の花が踏み折られていました。

オルガはのび上がって見ました。

兵十が、白い袴を付けて、位牌をさげています。

いつもは赤いさつまいもみみたいな元気の良い顔が、今日はなんだかしおれていました。

「そうか。死んだのは兵十の母親か」

オルガは、そう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、オルガは、穴の中で考えました。

「兵十の母親は、床についていて、火星ウナギを食べたいといったに違いねえ。それで兵十がはりきり綱を持ち出したんだ。ところが、俺がいたずらをして、うなぎを取つて来ちまった。だから兵十は、母親に火星ウナギを食わせることができなかつた。そのまま母親は、死んじまつたに違いねえ。ああ、火星ウナギが食いてえ、火星ウナギが食いてえ

と思ひながら、死んだんだらう。ちつ、あんないたずらをしなけりやよかつたぜ」

兵十が、赤い井戸のところまで、麦をといでいました。兵十は今まで、おつかあと二人きりで貧しい暮らしをしていたもので、おつかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。

「俺と同じひとりぼっちの兵十か」

こちらの物置の後ろから見ていたオルガは、そう思いました。

オルガは物置のそばをはなれました。するとどこかで、火星イワシを売る声がします。

「火星イワシの安売りだあい。生きのいい、イワシだあい」

オルガは、その、威勢のいい声のする方へ走つていきました。

と、弥助のおかみさんがうら戸口から、「イワシをおくれ」と言いました。

イワシ売りは、イワシの籠を掴んだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るイワシを両手で掴んで、弥助の家の中へ持つて入りました。

オルガは、その隙間に、籠の中から、五、六匹のイワシを掴み出して、もと来た方へかけ出しました。

そして、兵十の家の中へイワシを投げこんで、穴へ向かつて駆け戻りました。

途中の坂の上でふり返つてみますと、兵十がまだ、井戸のところまで麦をといでいるの

が小さく見えました。

ごんは、ウナギの償いでに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

次の日には、オルガは山で火星ヤシをどつきり拾って、それを抱えて、兵十の家へ行ききました。

裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶碗を持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには、兵十のほつぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだと、オルガが思っていますと、兵十が独り言を言いました。

「いったいだれが、火星イワシなんかをおれの家へほうりこんでいったんだらう。おかげで俺は、盗人と思われて、イワシ屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

オルガは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、イワシ屋にぶん殴られて、あんな傷まで付けられちゃったのか。

オルガは、こう思いながら、そつと物置の方へ回って、その入口に火星ヤシを置いて帰りました。

次の日も、その次の日も、オルガは、火星ヤシを拾っては、兵十の家へ持ってきてやりました。

その次の日には、火星ヤシばかりでなく、火星キノコも、二、三本持っていききました。

月のいい晩でした。オルガは、ぶらぶら遊びに出かけました。ラスタル様の要塞の中を  
通って少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こえます。  
チンチロリン、チンチロリンと火星虫が鳴いています。

オルガは、道の片側にかくれて、じっとしていました。話し声はだんだん近くなりま  
した。

それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」

「ああん？」

「おれあ、この頃、とても、ふしぎなことがあるんだ」

「何が？」

「おつかあが死んでからは、誰だか知らんが、俺に火星ヤシや火星キノコなんかを、毎日、  
毎日くれるんだよ」

「ふうん。誰が？」

「それが、わからんのだよ。俺の知らんうちに、置いていくんだ」

オルガは、二人の後を尾けていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。嘘だと思えば、明日見に来いよ。その火星ヤシを見せてやるよ」

それなり、二人は黙って歩いていきました。

加助がひよいと、後ろを見ました。

オルガはびつくりして、小さくなって立ち止まりました。

加助は、オルガには気が付かないで、そのままさつきと歩きました。

吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来ると、二人はそこに入っていきました。

ポンポンポンと木魚の音がしています。

窓の障子に灯りがさして、大きな坊主頭が写って動いていました。

オルガは、詠唱を開始しているんだなと思いつつながら、井戸のそばにしゃがんでいました。  
た。

しばらくすると、また三人ほど、人が連れ立って、吉兵衛の家に入っていきました。

やがて、お経を読む声が聞こえてきました。

オルガは、詠唱がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助はまた一  
緒に帰っていきます。

オルガは、二人の話を聞こうと思つて、兵十の影法師を踏みながら尾けていきました。

要塞の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、ニュータイプの仕業だぞ」

「えっ?」

兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりや、人間じゃない、ニュータイプだ。ニュータイプが、お前がたった一人になったのを哀れに思つて、いろんなものを恵んでくださるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだと。だから、毎日、ニュータイプにお礼を言うがいいよ」

「うん」

オルガは、へえ、こいつはつまらねえなと思いました。

俺が、火星ヤシや火星キノコを持つていつてやるのに、その俺にはお礼を言わないで、他作品のニュータイプに礼を言うんじゃないやあ、俺は、引き合わねえなあ。

その明るる日もオルガは、火星ヤシを持つて、兵十の家へ出かけました。

兵十は物置で縄をなっていました。

それでオルガは、裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。

と、狐が家の中へ入ったではありませんか。

こないだ火星ウナギを盗みやがった、あのオルガイツカめが、またいたずらをしに来たな。

「獣を仕留めるには、ふさわしい作法っちゅうもんがあるそうだ」

兵十は、立ち上がって、納屋にかけてあるダインスレイヴを取って、電力を供給しました。

そして足音を忍ばせて近寄って、今、戸口を出ようとするオルガを、ドンと撃ち、オルガの体に穴が空きました。

そこに兵十が駆け寄ってきました。

家の中を見ると、土間に火星ヤシが固めて置いてあるのが目につきました。

兵十はびっくりしてオルガに目を落としました。

「オルガ、お前だったのか、いつも火星ヤシをくれたのは…」

オルガは、ぐったりと目をつぶったまま、頷きました。

「オ、オルガ…。あつ…。ああ…」

「なんて声出してやがる…。兵十」

そう言つてオルガは、ふつ、と兵十に笑顔を見せました。

「俺は鉄華団団長オルガ・イツカだぞ。これくらえなんてこたあねえ」

「そんな…。俺はなんてことを」

兵十は、ダインスレイヴをばたりと取り落としました。

「俺は止まんねえからよ、お前が止まんねえ限り、俺はその先にいるぞ！ だからよ、止

まるんじやねえぞ…」

赤い血が、オルガの指先から細く出ていました。